

【報告】

一橋大学附属図書館ディスカバリーサービス改修事例報告

柴田 育子

(学術情報課雑誌情報係)

尾城 友視

(学術情報課レファレンス係)

一橋大学学術・図書部

1. はじめに

本稿では、図書館ウェブサイトのリニューアルに伴い2019年度に行われたディスカバリーサービスの改修について報告する。改修の経緯や具体的な作業内容のほか、OPACも含めた図書館の検索サービス全体の整理や、運用体制の見直しについても触れる。なお、本稿は2020年6月に行われた株式会社サンメディア主催「第1回学術情報ソリューションセミナー on the Web¹」での事例報告の内容を再構成し、加筆・修正したものである。

2. 改修の経緯

2.1 ディスカバリーサービス導入後の運用状況

一橋大学附属図書館（以下、当館）では、増加する電子リソースの提供環境として、2014年4月にProQuest社のディスカバリーサービス「Summon²」の提供を開始した。Summonの特徴の一つに、電子ジャーナルや電子ブック等の電子リソースや、ウェブ上で利用できるコンテンツ、そして図書館の所蔵資料をまとめて検索できることが挙げられる。しかし、当館で公開した当初は、OPACをはじめとする他のサービスやデータベースとの連携は十分ではなかった。このため、その時点での機能に即して「学術論文検索サービス（仮称）」として公開された。その後、公募による愛称の募集・投票が行われ、8月に既存のOPACの

¹ “第1回学術情報ソリューションセミナー on the Web”. サンメディア.
<https://www.sunmedia.co.jp/e-port/online-support/folder/event/solution-seminar2020.html>, (accessed 2021-02-05).

² “Products - Summon®”. ProQuest. <https://about.proquest.com/products-services/The-Summon-Service.html>, (accessed 2021-01-13).

名称「HERMES」との関連性も感じられる「HERMES-Articles」という愛称が決定した³。2015年1月には、図書館業務システムのリプレイスに伴い、OPACの検索画面上に「世界の論文等」という名称のタブを追加し、このタブからHERMES-Articlesを検索することができるようになった(図1)。同様に、図書館ウェブサイトのトップページに配置した検索ボックスにも、「論文検索」というタブが追加された(図2)⁴。続く3月には、公開時に保留となっていたOPACとの連携が行われ、HERMES-Articlesの検索対象に本や雑誌といった図書館蔵書が含まれることとなった。並行して他のデータベースとの連携も進められ、HERMES-Articlesの検索結果は多様になる一方、少しずつ名称とサービス内容に齟齬が生じていたが、既に定着しつつあった名称の変更には至らなかった。

このように、当館におけるディスカバリーサービスは徐々にアクセスポイントや検索対象となるデータを増やしてきた。しかしこの間、当館の中心となる検索サービスは依然としてOPACであり、ディスカバリーサービスはあくまで論文検索や各種データベースをまとめて検索するための補助的なツールという位置付けに留まっていた。



図1 旧一橋大学蔵書検索 HERMES (OPAC) のトップページ

³ 一橋大学附属図書館。「学術論文検索サービス(仮称)」の愛称が決まりました!。BELL. 2014, (115), p.2, <https://hdl.handle.net/10086/61796>, (accessed 2021-01-13).

⁴ 当時のOPACも図書館のウェブサイトも、ディスカバリーサービスを使って検索するには図中に示している赤枠のタブをはじめにクリックして画面を切り替えてから検索しなくてはならず、利用者には分かりにくかった。



図2 旧一橋大学附属図書館ウェブサイトのトップページ

2.2 図書館ウェブサイトのリニューアル

こうして導入からの5年間は、特に大きな見直しを迫られぬままディスカバリーサービスの運用が続けられたが、2019年度に実施した図書館ウェブサイトの全面的なリニューアルを契機に、ディスカバリーサービスの改修に至ることとなった。

ウェブサイトのリニューアルに際しては、その検討や作業にあたるプロジェクトチーム(以下、PT)が館内に組織された。PTが策定した新ウェブサイトのコンセプトでは、「非来館利用の重視」が挙げられ、このことから「電子リソースにアクセスしやすいウェブサイト」を目指すこととなった。非来館利用者は、自宅や研究室から図書館サービスを利用するため、図書館にある資料よりも電子リソースの利用が中心であると考えたためである。

このコンセプトに基づき、ウェブサイトのトップページには、アクセスしてすぐに資料検索を行うことができるよう、資料の検索ボックスを配置することがPTの方針として当初から合意されていたが、旧ウェブサイト同様にOPACの検索ボックスを最優先として配置すべきか、電子リソースへのアクセスの利便性を優先し、ディスカバリーサービスの検索ボックスを配置すべきかが議論された。

結果を先に述べると、2020年2月3日に公開されたリニューアル後のウェブサイトのトップページには、ディスカバリーサービスの検索ボックスが配置されている(図3)。では、

どのような点がPTで議論されたのか。それは率直に言うならば、「ディスカバリーサービスが使い物になるだろうか」という疑問と、ディスカバリーサービスによってある種の問題解決が図れるのではないかという期待の両者であった。PTで言及されたことをまとめると、次のような内容になる。

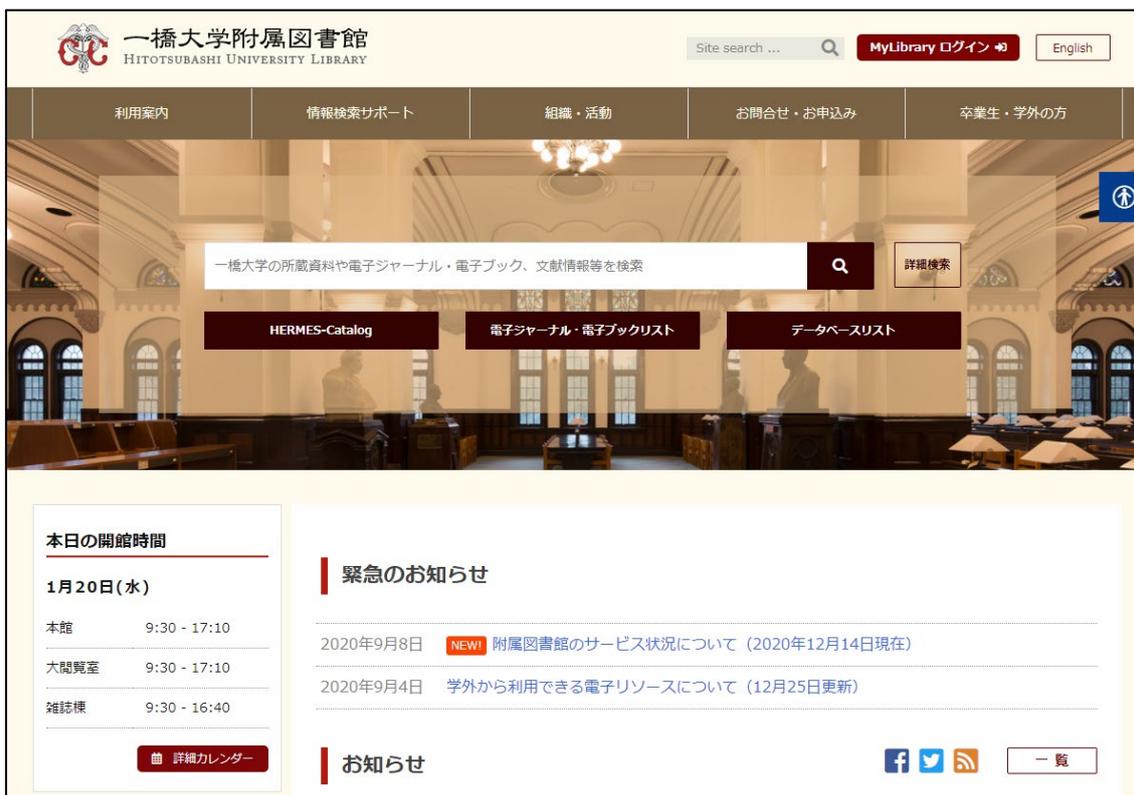


図3 リニューアル後の一橋大学附属図書館ウェブサイトトップページ

2.3 課題1：図書館職員のディスカバリーサービスへの理解不足や苦手意識

2014年4月のディスカバリーサービスの運用開始にあたっては、2013年度から「電子的資料の利活用等に関するプロジェクトチーム」が製品比較や導入のための具体的な検討及び初期設定や導入後の広報等を担い、運用開始後、2014年度をもって解散となった。このPTに参加していた職員は、活動を通してディスカバリーサービスや Summon に対して理解を深める機会を得たが、他の職員は必ずしもそうではなく、その後PTメンバーの多くが館外へ異動してしまったことも重なり、ディスカバリーサービスに関する知識が十分に館内で共有・蓄積できなかった。

そして導入時の経緯やディスカバリーサービスの仕組み、こういった外部データベース

と連携しているかをよく知らぬまま HERMES-Articles を試しに使ってみた職員は、次のような経験をすることになる。---「論文検索がウリなのだから」と、任意のキーワードで論文検索を試みるが、論文がまったくヒットせず、図書館の蔵書から図書ばかりがヒットする。絞り込みもできるようだが、項目の意図するところがわからない。あるいは、論文はヒットしたけれど本文にはアクセスできず、リンクリゾルバの画面に飛ばされる。結局、掲載誌の所蔵を調べるために、OPAC に移動している。これなら最初から文献データベースや OPAC を使う方が効率的ではないか。---

つまり、参考調査や ILL 業務で特定の論文の所蔵を確認する場合も、掲載誌を OPAC で探せばよいし、論文を一から探す場合も既知の文献検索データベースを使えばよい。図書館職員にはこうしたツールの使い分けが身に付いているがゆえに、こうした失敗体験やディスカバリーサービスに対する疑問があえて共有されることは少なく、次に述べる課題 2 とも関連し、問題提起に繋がらなかった。結果として、ディスカバリーサービスへの理解不足や苦手意識が解消されない状況が続いてきたものと思われる。

2.4 課題 2：ディスカバリーサービスに対する主体的な関与の欠如

もう一つの課題として、ディスカバリーサービスの担当者が曖昧であったということも挙げられるだろう。導入後も、契約担当係がナレッジベース上でのデータの追加や修正を行っており、電子ジャーナルや電子ブックのデータのメンテナンスは続けられていた。しかし、ディスカバリーサービスそのものについての方針を議論したり、情報共有を行ったりする場はなく、積極的な利用促進も行っていなかったために、課題解決の緊急度や重要度は低く、どこか宙に浮いたサービスとなってしまった。

これが図書館業務システムや OPAC であれば、各係の所掌範囲がより明確で、不具合にすぐ対処する体制や必然性があり、サービスや業務に直結することから職員全員が主体性をもって関与する土壌が既にできている。ディスカバリーサービスに関しても、課題 1 で触れたようなことも含め、個々の職員は疑問や問題意識を持っていたにも関わらず、それらを共有し、改善につなげていく仕組みがないこともその一因であったろう。

2.5 期待

一方で、ここ数年においては、再びディスカバリーサービスへの期待が高まる場面も見られた。その一つが、2017 年度から実施している学部初年次生に特化した図書館ガイダンス

である。学部の授業と連携し、同じ内容のガイダンスを短期間に繰り返し行うものであったため、2017年度から2019年度にかけては、数名のガイダンス担当者だけでなく全館体制で実施した⁵。ガイダンスでは論文の検索や入手方法も扱うが、論文の書誌情報から掲載誌のタイトルを確認し、OPACでその雑誌のタイトルで検索を行うという手順を繰り返して説明する。しかしながら、検索実習では多くの学生が論文タイトルでOPACを検索してしまうケースが頻発していた。

この問題はガイダンス担当者間では以前から共有されていたが、全館体制で実施したことで、多くの職員が学生の検索行動を目の当りにし、問題意識を館内全体で共有することに繋がった。文献検索に不慣れな利用者にとっては「論文を探しているのに雑誌名で検索する」という行動はなじみにくく、論文は論文単位で検索でき、かつシンプルな手順で本文を入手できることが利用者にとって最善ではないか、といった意見も聞かれた。

加えて、図書館員にとっても、近年電子リソースが増える中で、管理面での大きな期待があった。当館では、これまで電子ジャーナルや電子ブックの書誌データを一つずつ作成し、一括登録を行い、OPACで検索できるようにしていた。このため、OPACを使えば、冊子体資料と電子リソースを意識せずにまとめて検索できるので便利であったが、書誌データの作成・登録を行う作業にはかなりの時間と手間がかかっていた。そのため、トライアルや試読可能な電子ブックのタイトルには到底手が回らなかった。

その一方で、ナレッジベースによる電子ジャーナル、電子ブックの管理も行っており、リンクリゾルバやタイトルリストも提供していた。ナレッジベースでの管理は、管理画面から契約したデータベースないしはパッケージ名を選択するケースが多く、さらにSummonへの連携も可能である。トライアルや試読タイトルも同様に提供できる。ディスカバリーサービスの使いづらさが改善されれば、OPACとナレッジベースでの二重管理を解消できるのではないか、という意見もあった。

このように、図書館ウェブサイトのリニューアルPTにおいて議論が開始された時点では、課題と期待の両者が挙げられていた。課題となっている点を改善できれば、ウェブサイトのトップページにディスカバリーサービスの検索ボックスを置くこともできるだろうと

⁵ 2020年度においては、コロナ禍により対面ガイダンスを実施することができず、動画提供で代替したため、このような実施体制ではなかった。2021年度もガイダンス担当者がオンラインで実施する予定のため、全館体制で実施できたことは貴重な機会となった。

いう結論に至った。そこで、ウェブサイトのリニューアルPTの中のメンバーからさらにディスカバリーサービスの改修を行うメンバーを選出し、新たなPTを立ち上げた。様々な係の立場から検証を行うため、本稿の執筆者である雑誌情報係長及びレファレンス係員の2名と、村井しのぶ電子情報係員（当時）がその任に就くこととなった。

3. 改修の内容

ディスカバリーサービスの改修PTが念頭に置いたのは、まずは図書館職員にディスカバリーサービスを受け入れてもらうことであった。そのために、ディスカバリーサービスの位置付けを示し、使いづらい部分を改善することを目指した。主な改修点は、次に述べる「コンセプトの見直し」「インターフェースの改善」「外部コンテンツ・サービスとの連携」「OPACとディスカバリーサービスの役割分担」「日本語論文検索動線」である。

3.1 コンセプトの見直し

まず、当館におけるディスカバリーサービスの位置付けを含め、コンセプトの見直しを行った。これまで「論文検索ツール」としての印象付けがなされてきた当館のディスカバリーサービスであったが、より実態に即した形とするため、「一橋大学で利用できる学術情報を広く検索するためのツール」として位置付け直すこととした。これに伴い、「HERMES-Articles」という名称も「HERMES-Search」に変更し、論文に限らず、様々な資料や情報を探すツールであることを表現することを提案した。この意図をより明確にするため、追って作成されたロゴにおいては、「一橋大学学術情報検索」とルビを振っている（図4,5）。



図4 名称変更前の HERMES-Articles のロゴ



図5 名称変更後の HERMES-Search のロゴ

3.2 インターフェースの改善

続いて、多くの職員が直感的に「使いづらい」と感じていたインターフェースの改善を行った。改修前の画面（図6）の主な問題点として、次のような点が挙げられた。

- ① ヘッダー部分の背景色と文字色のコントラストが弱く、見づらい
- ② 項目名や画面上の説明に、何を意味しているのか分かりづらい箇所がある
- ③ 使用頻度の高いファセットが埋もれていて、直感的に使いづらい

こうした点を、Summon の管理画面から修正していった。Summon には多くの設定項目があり、修正した結果や挙動を一つ一つ確認しながらの作業であった。改修後の画面は図7のとおりである。

画面上の配色は、並行して進められていた図書館ウェブサイトのリニューアル後のデザインに合わせて統一感を出しつつ、可読性を向上させるよう心掛けた。

項目名や画面上の説明に関しては、Summon がもともと英語で作られたサービスであり、それを日本語に翻訳しているため、不自然に感じられる部分や、意味が伝わりづらい部分が散見される。PT メンバーでわかりづらい部分を抜き出して、管理画面でオリジナルの英語表現を確認し、対応する日本語訳の変更を行った。

例を挙げると、画面左側のファセットのうち、図書館の所蔵資料のみ表示させる項目名は、もとの英語表記では「Library Catalog」であり、デフォルトの日本語訳は「図書館カタログ」であった。利用者にとってはわかりづらい表現であると思われたため、当館 OPAC の名称を併記した「図書館蔵書 (HERMES-Catalog)」に変更するなどした。

Summon のファセットには様々な種類があり便利だが、これまで「主題」が上位にあったものを、検索結果から必要な資料に素早く絞り込みを行えるようにするため、「資料タイプ」をより上位に移動させた。

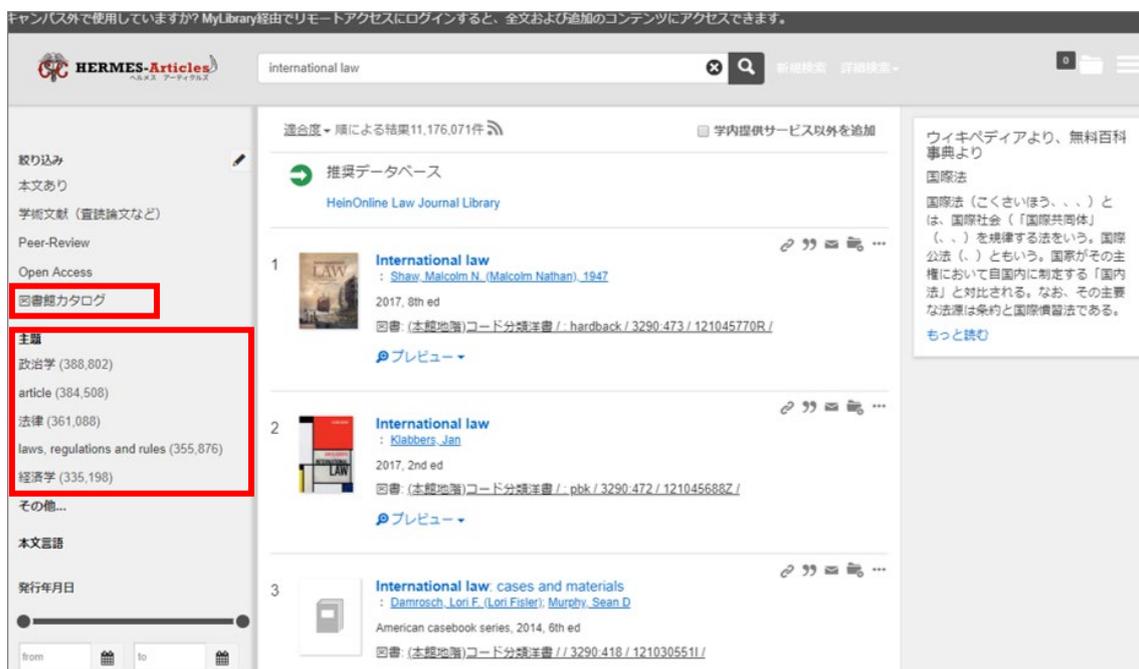


図6 改修前の検索結果画面

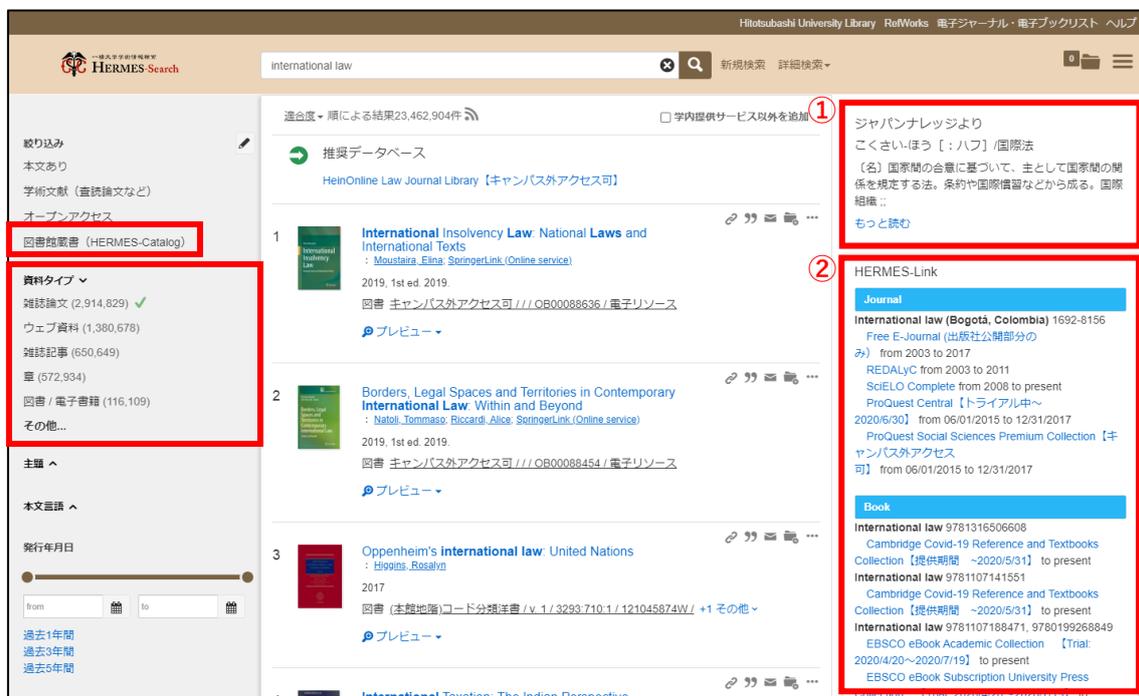


図7 改修後の検索結果画面

3.3 他のサービス・データベースとの連携

Summon では、他のサービスやデータベースと連携し、それらが持つデータを Summon の検索結果に含めるだけでなく、様々な方法で表示させることができる。例えば、検索結果画面の右側はカスタムパネルと呼ばれる領域で、機関ごとに独自に設定した内容を表示させることができる。カスタムパネルの利用方法は多岐にわたるが、当館では、Summon の検索語を引き継いで、連携している各データベースを検索する機能を新たに活用することとした。

最上段のカスタムパネルでは、「ジャパンナレッジ Lib」の検索結果を表示させている（図 7 ①部分）。ジャパンナレッジ Lib は複数の辞事典、叢書、雑誌を横断検索できる機関向けのデータベースだが、検索キーワードの辞書的な意味を表示することで、文献を探すだけでなく、その検索キーワード自体に対する理解を深めてもらうことがねらいである。

上から2番目のカスタムパネルでは、リンクリゾルバ⁶との連携を行った。後述する OPAC との役割分担とも関連するが、Summon は電子ジャーナルのタイトル単位のメタデータを持たないため、当館で冊子体を持たず、電子ジャーナルでしか利用できない雑誌は、タイトルで検索してもヒットしない。利用者が雑誌のタイトルで検索した場合にも、このカスタムパネルが表示されることで利用可能な電子ジャーナルを示すことができる（図 7 ②部分）。

更に下段には、OPAC に検索キーワードを引き継ぐためのカスタムパネルや、図書館からのお知らせを掲載するカスタムパネルを追加した。

3.4 日本語論文検索動線

その他、検討を要したのが日本語論文の検索動線についてである。当館では、ウェブ上で本文が公開されていない日本語論文に関しても、冊子の所蔵や ILL により比較的容易に本文を入手できると考えられるため、ディスカバリーサービスの検索対象にしたいと考えていた。

Summon では、CiNii Articles や J-STAGE をはじめとするデータベースと連携することで、日本語論文の検索が可能である。当初、CiNii Articles との連携により日本語論文のほぼ全体をカバーできると考えていたが、実際に検索を行うと、ヒットしない論文が数多くあった。調べてみると、CiNii Articles から Summon に提供されるデータは、2017年4月以

⁶ 当館では Summon と同じく ProQuest 社が提供する 360Link を導入している。

降更新されていない⁷ということがわかり、日本語論文の検索動線を改めて考えなおす必要が出てきた。検討の結果、新たに国立国会図書館雑誌記事索引（以下、雑誌記事索引）と連携することで問題は解決するかと思われたが、ここで問題となったのが検索結果から本文入手に至るプロセスである。

Summon 上でヒットした雑誌記事索引由来の検索結果は、論文のタイトルをクリックすると、国立国会図書館サーチの検索結果に遷移する。そこから本文を入手するには、画面中の「見る・借りる」欄から国立国会図書館オンラインか CiNii Books に飛ぶことができる。国立国会図書館オンラインからは、国立国会図書館の遠隔複写サービスの申込みに進むことができるが、通常の雑誌論文であれば、大学図書館同士の ILL を利用する方が適切である。では、CiNii Books から大学図書館の所蔵状況を確認しようと考えリンクをクリックすると、論文のタイトルで CiNii Books が検索されてしまい、当然論文の掲載誌の所蔵情報はヒットせず、入手プロセスがここで途絶えてしまう。

この状況を代理店である株式会社サンメディアに相談したところ、Summon 上での雑誌記事索引の検索結果は、国立国会図書館サーチではなく、リンクリゾルバによる中間画面（図8）に遷移させる提案を受けた。

探している論文

プラスチックリサイクルの現状とSDGsが目指す社会におけるプラスチックの使い方

著者： 徳, 加茂
 ジャーナル： 工業材料 = Engineering materials
 ISSN： 0452-2834
 日付： 2020/10/01
 巻： 68 号： 10 ページ： 20-25

本学で利用可能な電子リソースからは本文が見つかりませんでした。
 ・論文によってはオープンアクセス版が公開されている場合があります。こちらにて、論文名やDOIで検索ください。
 ・あるいは、以下の方法で探してみてください。

ウェブで本文が見つからない場合は

Step1. 一橋大学の所蔵を探す

蔵書検索 HERMES-Catalog	図書や雑誌のタイトルで検索	ISSN/ISBNで検索
---------------------	---------------	--------------

Step2. 図書館に文献の取寄せを依頼する（有料）

文献複写	申し込み
------	------

参考：その他の情報源から探す

CiNii Books	図書や雑誌のタイトルで検索	ISSN/ISBNで検索
CiNii Articles	論文名で検索	第一著者名で検索
Google Scholar	論文名で検索	第一著者名で検索
Web of Science	雑誌タイトルで検索	第一著者名で検索

図8 リンクリゾルバによる中間画面の例

⁷ CiNii Articles が Summon に提供していたメタデータは、2017年3月に終了した国立情報学研究所電子図書館事業（NII-ELS）の対象となる論文データであったためである。

これにより、国立国会図書館サーチに飛ばすことなく、学内や他大学の所蔵の確認や、ILLの申込みに誘導できるようになった（図9）。このように、Summon では連携したデータベースごとに遷移先を変更することもできる。

こうして、J-STAGE や機関リポジトリ等によりウェブ上で本文が公開されている論文に加え、冊子でしか入手できない日本語論文の検索も HERMES-Search で行うことができるようになった。

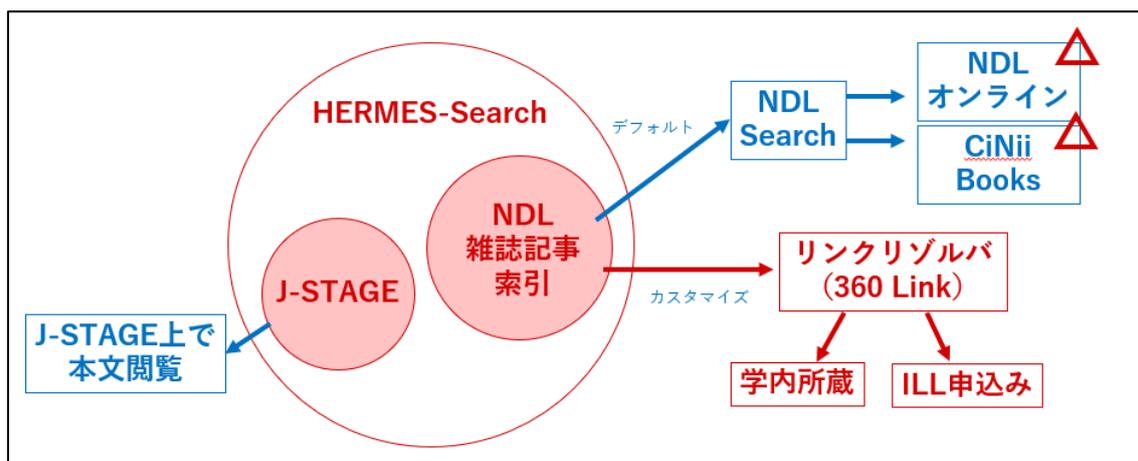


図9 日本語論文の検索動線イメージ

4. OPAC とディスカバリーサービスの役割分担

以上、コンセプトや名称の変更が始まり、様々な改修を行うことで、これまで半ば放置されていたディスカバリーサービスを整備することができた。この結果を受けて、図書館ウェブサイトのリニューアルに際しては、OPAC ではなくディスカバリーサービスの検索ボックスをトップページに据えることが了承された。同時に、これまで OPAC が担ってきた電子リソースの提供機能を見直すことが可能となった。

既に述べたとおり、当館では、ナレッジベースの管理によってリンクリゾルバやタイトルリストで電子リソースを提供するほか、OPAC にも電子ブックや電子ジャーナルの書誌を個別に作成し、検索できるようにしていた。この二重管理は長らく業務上の負担であったが、今回の改修を機に、電子ジャーナルに関しては OPAC への書誌登録を中止し、これまでに登録した電子ジャーナルの書誌は削除することにした。これは、ディスカバリーサービスにおいて電子ジャーナルに収録されている論文単位での検索が可能であること、既に述べたリンクリゾルバとの連携により電子ジャーナルのタイトル検索にもある程度対応できるよ

うになったことで、これまで OPAC が担ってきた電子ジャーナル検索機能を代替できると判断したためである。

一方で電子ブックに関しては、出版社からナレッジベースへ十分なメタデータが提供されておらず、ナレッジベースの管理のみで満足いく検索結果を得ることは難しいと判断した。特に新刊タイトルを購入した際に、まだナレッジベースに書誌がなく、登録できないケースも多くあり、この問題は自館で即時解決できるものではないと判断した。そのため電子ブックはナレッジベースでの管理に加え、引き続き OPAC に個別の書誌を作成し、OPAC とのデータ連携によってディスカバリーサービスでの検索を可能にする方法を採用している。

このように OPAC から電子ジャーナルの書誌が削除されることにより、OPAC の電子リソースの提供機能が一部縮小され、ディスカバリーサービスの機能が強化されることで、当館の検索システム全体のバランスにも変化が生じた。これまでは OPAC が中心的な検索ツールであったところ、その比重がディスカバリーサービスに大きく移ることになったのである。しかしながら、これまでは「図書館の資料を調べるなら HERMES (OPAC) で」というのが教員・学生も含めたお約束であった。その認識を「一橋大学で利用可能な資料を調べるなら HERMES-Search」へ変える必要があった。

ここで PT メンバーは、長らく親しまれてきた OPAC の名称「HERMES」を思い切って変更することを提案した。HERMES-Search の旧名称は HERMES-Articles であったが、当館では他にも、機関リポジトリに「HERMES-IR」、リンクリゾルバに「HERMES-Link」といったように、これらが HERMES から派生したサービスであるかのように名称を付けてきた。このイメージを、並列なものに変えたいと考えたのである。具体的には、HERMES を OPAC 固有の名称とするのではなく、当館の検索サービス全般の概念と捉え、OPAC の名称を「HERMES-Catalog」と変更することを提案した。この名称変更による各サービスの関係性の変化を簡易的に図示したのが図 10 である。

この提案が了承され、OPAC とディスカバリーサービスの役割分担だけでなく、附属図書館が提供する検索サービス全般の整理を行うことができた。

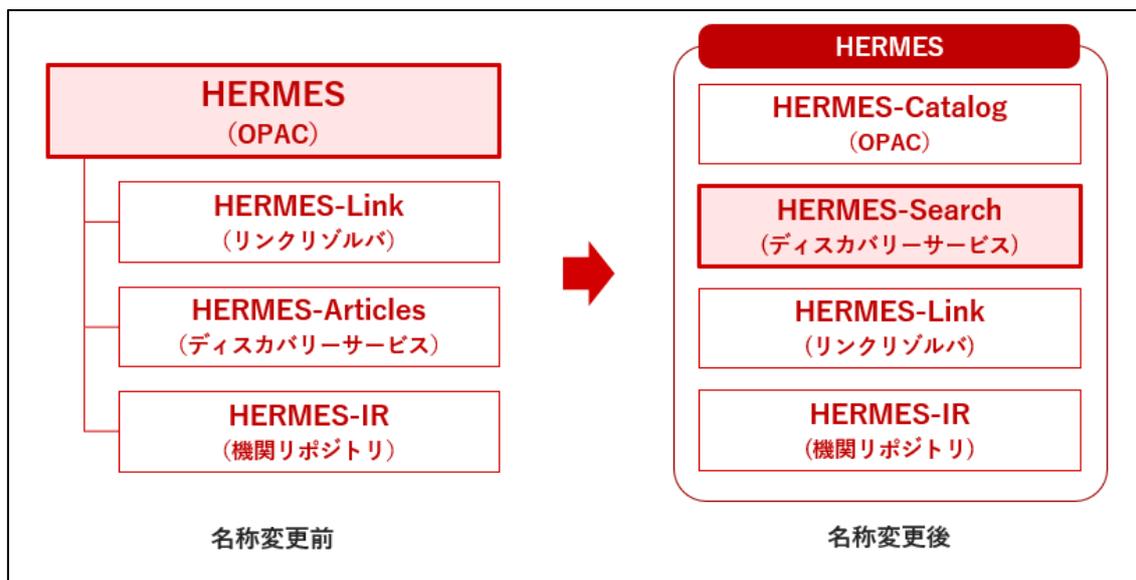


図10 OPAC 名称変更前後のサービス関係図

5. 運用体制の見直し

ここまで述べてきたディスカバリーサービスの改修や、それに派生した OPAC の運用変更に関しては、PT メンバーを中心に進めてきた。この過程を通じて PT メンバーは、ディスカバリーサービス導入時の PT メンバーと同様、ディスカバリーサービスや Summon に対する理解を深め、苦手意識をかなり減ずることができたように思う。しかしながら、今後も Summon のアップデートや不具合への対応といった日常的な業務に始まり、その時々状況に応じてディスカバリーサービスの運用を継続していくためには、館内全体で取り組む体制が必要である。冒頭で課題として挙げたように、再び主体性の欠けた運用を繰り返さないためにも、新たな運用体制の提案を行った。

まずはディスカバリーサービスに関する係ごとの業務分担を明確にした。PT メンバーに業務が属人化することを避け、係の業務の中にディスカバリーサービス対応を位置付けることがねらいである。

同時に、所掌範囲を超えてディスカバリーサービスや Summon 全般に対する理解を深め、より身近なものとして捉えられるような仕組みも考えた。小さなことではあるが、日常的に発生するディスカバリーサービスの話は、電子リソースに関する情報共有を行うための館内のメーリングリストでやり取りをし、さらに、年に2回程度定例会を開催することとした。

定例会では、一つの係では解決しづらい課題や、アップデートの検討など影響範囲の大き

い話題を扱うこととした。また、利用状況の分析も行いながら今後の改修や機能追加、新規カスタマイズを検討する場とし、その過程で出てきた疑問や問題を共有した上で、後日代理店にまとめて問い合わせ、より製品への知識を深めていくこととした。

6. 改修後の状況と今後の課題

以上のような改修を経て、2020年2月に新しい図書館ウェブサイトと同時に「HERMES-Search」として提供を開始したディスカバリーサービスだが、この1年で利用状況は大きく変化した。図11は、HERMES-Searchでの検索数や絞り込みの回数のグラフである。2020年2月以降、大幅に利用が増えていることがわかる。

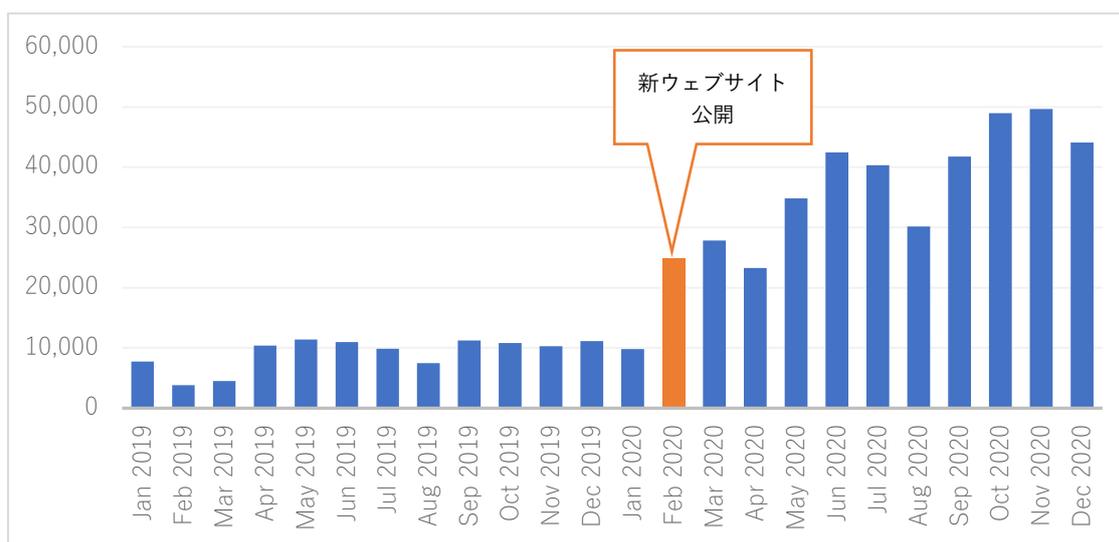


図11 HERMES-Searchの検索数や絞り込みの回数

ウェブサイトのトップページに検索ボックスを配置したので、利用が伸びることは当然予想していたが、リニューアル前に比べると倍増している。例年2月は在学生の学習・研究が一段落する時期でもあるにもかかわらず、これは期待以上であった。2020年4月にはやや利用が落ち込むが、5月以降は順調に増加傾向にある。この増減には、2020年2月以降に国内でも感染が広がった新型コロナウイルス感染症の流行状況も影響していると思われる。

一橋大学（以下、本学）では、新型コロナウイルスの流行拡大を受け、当初は一部の授業を除いて、予定どおり2020年4月6日から春夏学期の授業を開始する予定であったが、2020年3月30日に、春夏学期の全ての授業をオンラインで実施し、授業開始日を2020年

5月7日に延期することが決定した⁸。4月10日以降、本学の学生・教職員に対しても不要不急の入構は行わないよう通知され、教職員は在宅勤務が原則となり、当館も4月10日から臨時休館となった。例年4月に行っていた新入生向けの図書館ガイダンスも当然中止された。4月にディスカバリーサービスの利用がやや落ち込んだのは、こうした事態を受けてのものであったと思われる。

この間、図書館職員は5月の授業開始に向けて、学外から利用できる電子リソースの急拡大にはじまり、その周知や、リモートアクセスを前提としたガイダンス動画の作成など、教員や学生が資料にアクセスできるような体制作りに追われた。図書館業務システムは自宅から利用することができなかったが、Summonの管理サイトは自宅からでもアクセス可能で、新たに利用可能となった電子リソースをディスカバリーサービスで検索できるようにするといった作業は、在宅勤務下においても可能であった。5月以降、ディスカバリーサービスの利用数が再び増加に転じたことは、それらの取り組みの一つの成果であったといえるだろう。

当館の臨時休館は2020年9月13日まで続き、その間、学内者に対しては限定的な来館サービスを実施してきたが、例年に比べて利用者の来館機会は大きく減少した。しかしこのような状況下で電子リソースの利用頻度が高まったと考えられ、奇しくもすべての利用者が、新しいウェブサイトの「非来館利用重視」というコンセプトに合致する形で図書館のサービスを利用することとなったのである。こうした事態を予想していたわけではもちろんなかったが、新しいウェブサイトのコンセプトと、それに基づいたディスカバリーサービスの整備により、電子リソースにアクセスしやすい環境を作っておいたことが、コロナ禍においてある程度功を奏したのではないかと考えている。

このような状況だったからこそ、新たな課題もはっきりと見えてきた。せっかくトップページに配置したディスカバリーサービスの検索ボックスであるが、学外から検索すると、電子リソースの一部が検索結果に表示されないのである。電子リソースは、通常学内のIPアドレスで認証を行いアクセス可能となるため、当然学外からはアクセスできない。こうした学外からアクセスできない電子リソースが、ディスカバリーサービスの検索結果からは除外されてしまうのである。ただし、本学では一部の電子リソースへのリモートアクセスを

⁸ 一橋大学. (学生の皆さんへ) 2020年度・春夏学期の授業について (3月30日更新). https://www.hit-u.ac.jp/students_info/7382, (accessed 2021-02-16).

EZproxyにより実現しており、これらの電子リソースは、学外から検索した場合でも表示させたい。このためには、トップページの検索ボックスを使わず、HERMES-Search自体に別途リモートアクセスする必要がある。この手順は、ガイダンス等で利用者に案内しているが、おそらく気が付かないままトップページの検索ボックスを使っている利用者もいることが予想される。トップページの検索ボックスをリモートアクセス対応させる方法については、目下検討を進めている。

7. 最後に

今回の改修を振り返ってみると、既存のサービスを手直しすることに留まらず、サービスのコンセプトや利用目的を問い直すことで、それに合わせて機能追加やカスタマイズを選択するということが上手くできたように思える。

また、職員のディスカバリーサービスへの苦手意識の払拭も視野に入れ、運用を継続するための体制づくりにも着手できたことは一つの成果と言えるだろう。本改修の“キモ”は、何より「職員にディスカバリーサービスを受け入れてもらうこと」であったといっても過言ではない。

今後は、利用に関する分析や評価を行いつつ、運用体制を継続し、利用者と図書館員の双方にとってより良いサービスを目指していきたいと考える。

[Report]

A case report on the improvement of discovery service at Hitotsubashi University Library
Shibata, Yasuko.

Serials Section, Academic Services Division, Department of Library Affairs, Hitotsubashi University

Ojira, Tomomi.

Reference Service Section, Academic Services Division, Department of Library Affairs, Hitotsubashi University